古今茶道全書　義

巻之二

花生様の事

一　人より花をおくり候時花瓶に入花切て挿す花生は

板東によみそくさことありか○るとも盆にのせて出之

一　板先附居の花と云ハ

正月　梅　元日草　ふく寿草　ふくつく草とも云

太ふくれ茶花に猿月　椿花

二月　黄梅　春椿

三月　桃　小梅　我妻菊　赤菊花　えんどう　藤

沈丁花　りんだう

四月　卯の花　牡丹　芍薬　長春　杜若　あやめ　石竹

美人草　庭桜　富士なでしこ　がんぴ　一八　山吹

姫ゆりぎぼうし 蘇枋 水仙 何もれんぎやう
ぬなるべし

一 花よりちんじやうに入ときは生花の如くすべし
て数多一風流の如くの工夫ありといへども
花みてもよろしのみにかゝりては花形みだるゝに出来
ものなり

釣舟の花の事

一 船より釣るとも出舟釣るも繋へは入舟夜は泊舟
と心得べし 船は何も出舟 出舟の方へは一筋
繋舟の方へは二筋の長さよろしきなり

一 舟の花入は正月中旬より八月末を用ひ外は略也

用ゆる閑定也

一 舟の花は舟の縁より上へ高き事を嫌ふなり
泊舟には糸柳又は萩などにて一本も二本もさげる
事もあり

一 舟の花入は水仙などよりいづれも花入によくかなふて珍敷
と又ては角あはせのごとく 萩なども花入よりも出舟入舟は其
心の程によく見るべし

一 島台の花は島の足より水へ垂るゝ花を嫌ふ
かくれのなきやうにするなり

一 廣口大花入には杜若 牡丹 芍薬の類の寄合を生るなり
何も高くさして儀式に立る事とは違ふ一つの作なるべし

一花附の花は世中にて衛の花は奥世つるべし氷
つ色花をかさ附のたゆそそその花の吉ゆゆる事を
菊金仙花などかつり初てをたしかなりく又は閑の
葉入ぺても物のく垣天の附方まて紅梅白梅紅桃
坊類をたくの互台板もありその事しも分
あらりしくて秋草など垣をもちょいに板何を掛御
何事ともされまて八珍花をいり花附の花を奥すし
つまて示おもちむけよ字のく中国ハ数字まんのところ
とまちて風情よ殊さく附するぬ花なれて凪御
のなまて珍夜桜を用る也

此花形出舟形の置
まずに留おおお
いろべし
舟にて八
梅
あし
の枝を留
花の向舟の
向ふんなんへ
て生ゐも
生るを心持ちて
ひるべし

花流

出船

釣舟花形

此花形は舟の形よりて舟よりも
ふりとおろしてくろしうるは
此花形は
よくと

玉柳系

てりせん

とめ中ゐ取りおる
前に生た花をとて此花よれ
多く相傳あり

此花形は
入舟の形
海上
ちかく
見

椿

山吹

入と
出川向すと
の事取りて分なし 習あり
の数多くあれば此花形ならし

高擬

此籠は天井の花によし
多くは色々数有へし

籠花生 内らけ有

じやう花なをし

薝蔔

梅

椿

唐物名物の花生形

右花形他之流手

中かふくろ生花

水仙

向ふに板かさねたる時ハ左三幅ともに圖のごとく
探知あるべし

二幅一對の懸巻

一ッ 繪掛ハ上座のかたよりかけ次に勝手のかたへ繪
おさむるなり 是ハ掛ハ下座のかたへ引よせておくる也 右同じ
一ッ 是も同じ掛ハ勝手より下座のかたへ鐶と釘まで
を出しおの〳〵繪ひとつ〳〵次に上座のかたを同じく
二ッ鐶と釘に寄せ掛ひおさむ繪て箱に入る掛絡の三段
つまりかたもあるとれ左右を知るべし

一 同幅一對の繪也

一 繪掛ハ中の二幅の内客座より掛次に主位より掛
次に繪の客居より前に主居よりかけ終る也
一 是も同じ掛ハ繪の主居より次に下のかたより左右
しかくさせおさむ 又繪の客居をまづ下に繪を下
方より出す門前次に中の主居繪をまづ中まで
き繪と同じ終るを下のかた入るべし 次に客
居をまづ主居やうにお修さおさまるを知のつ
るなだ畫にて下地考

大横物かけやう并

一 掛物は大幅また座中にかゝる亭主かたへの人へおいてやうにあれ
よりふすまを取りかけ掛ハ先繪ととろえのうけ風帯(?)
をまづかけ掛はすへ拙く掛座へ入まづ中とうけ上座の

置べし書院の時も此通也

同常式荘の法

一 大床にて此荘は石台立花二瓶立花香炉并燭台同

二幅一對砂物荘

一 大鉢花は向花の花瓶に傳て香炉香合の傳あるのことし砂物は脇也 鉢物并床の様子によりて香合あるべし

二幅一對盆石荘

一 盆山とも盆石とも云 四季にあひしらひ様さまざまの景よまら砂の入組様山石の入又同じく盆にはよらぬの景様あつまれ入又何も又入何もあり様二瀧の景なとあるは様ありとあるの傳受ある事

文臺荘の次第

一 文臺硯箱同上に香炉書院の巻物大高檀紙小高檀紙をも本料かみてこまかに硯箱又は紙硯をしよまにてかさる也

釣香炉の事

一 床かまち柱竿に折釘を打内らちへ香炉のくさりつりの環をかけてそれより向ひに縄をかくべし

釣花生の事

一 大床の花生も鐶一本の方の方へ[illegible]二本の[illegible]は勝手へ入へし花は釣香炉を出舟に生け方は入舟とんなべし舟にかけ帆の[illegible]

あひしらひ何も花のおもを形どりて摺知一つとす也

盛花生の事

一 大花瓶ハ花を一入たるハ生ころよし花の枝かゝり
作るくおもあり又水掛をとらけ花入かゝるも水掛の面也
花生れ花よあり

違棚錺の事

一 香炉食籠之内よ菓子入るものを上よハ黒布中に
釣掛下よ干菓子なくして又ハ香を置又ハ西楼棚よハ下に
壷か茶碗を立ふさん花小壷よし何も花ふ茶壷之
上よ置よ書香炉合香箱ハ見合有りハみな口又ハ口
よせるよし又上下棚よハ床押の下刻ん下一方に

錺兵床計也花瓶香合能也

上段床損地卓香炉花

一 卓ハ中央香炉見合卓下の花足の方へ出さる
据よ出る又損地の時ハ香もさ卓へひろさるハ
合よし又香炉之れハ平卓よし
一 御かけ地上段よかゝるも床前の後前ふまる牙璧
まも多く多編西面桂ろと多く桂るとよふれ御
殊さもの前ハ上下計中かれ一文字在縁
常御合又ハ引睦るとまて表具のけとつあるえ床
表具の花さるべし
一 床の花見るる事同幅一對二瓶卓香炉もすへく

上を書院にハ下段よりも上段に宮居二幅の三幅の中ニて
舞して扇子をぬき二幅くの絵掛をみる床より八三尺
引て見べし又三幅対をみる時ハ三尺より脇掛をつぎてみるとき
ハ中をもみる人三尺へ又寄りて卓香炉をみる也其外へ
寄て又二幅をみる三幅をみん又三尺へ引てよりて五幅と
みて何と見ることならんハ三幅対二幅対大横物
皆墨絵掛物とみん揃ゐ事此例をもちて考へ知るべし
一上段の床一幅掛卓香炉みん揃ゐ床の間より書院へ入
上段よりあがりてみんけ掛をみん香炉卓くとみん違棚ハ下ぞ
ひとくみん香炉みん時分あるとて下にゆく掛居入り書
院床へむかひ右の見座のあるかたよりみん様たくより書物

を見る掛物字の書院へゆきて上よりはくかんかけ三尺ほど
見え横物ハ尺とつまき卓下にも軸とみんてよき地と一間
見るて物書院ハ物て帳に掛物七八尺ゆ後へ寄りて見
みる事にかさるよ及びてしかの中にかけとみて知るべし
此次し

四幅對掛に入るは四季絵の圖

春　夏　秋　冬

八景も

三幅對表具入様并其結の図

右　中　左

大横抱と付中
其の結ハ右ニ同

二幅對表具入様并結

右　左

竜梅

虎竹

基子せん屏風の事

一 屏風ハ大縁二寸小縁二分也

一 短冊ハ幅一寸八分長サ一尺二分也

一 短冊ハかけ押やうの事丁半角丁半角丁半角と押なる也

一 丁と云ハ短冊の頭とそろへてぬるゝ也半と云ハ短冊の中程と合て次の短冊の頭を押也角と云ハ短冊と短冊のすきまを合て押様也

一 惣して短冊を押揃る下とする附半角の見合也さる縁より吟味する也

一 色紙并押様の事丁半角半角丁角丁半押かり大丁半角の事ハ短冊の掛ケ同し

一 屏風縁の色々吟味の事

一 大縁まき地ハかうぞ小縁赤又よし大縁赤き地

又地あるハ小縁黄色を用べし
大縁黄色也されバ小縁ハ白色縁なるべし大縁白紙縁
すミ色藍ひとき紫なるもの小縁ハ黒き色を用ゐ其
おもの色を唯白として其ゆゑを見れバ合するなり
きさら法也

茶會献立之事

一茶會者客之菜立といふハ及ぶ纏起じて料理を
無の献立する二珍味料理之風味に似く菜味を
糸のまゝに用之古人所謂不時の食と云事なり
茶の献之又千家茶道宗匠之献立以て伝へるところ
略く記写并に季節に宜き食物も此中之

一古田氏年始之會席
若菜汁と云献立
汁　小鳥たゝき　せり白根同葉ちらし　まく　ゆの吸口

一細川氏同三席献立
汁　鶏ならびに切　大かぶら竹　ささごぼう　せり白根　うどのめ吸口

一小堀氏同會席献立
汁（ゑまし汁）　うどすりながし　あをさまつ　うどのめ吸口

一利休同三席の献立
汁（みそ汁）　ささゑび　焼山芋小口切　せり葉吸口

一金森氏同三席之献立
汁　たいつみき　引きたとまつ　うどのめ

一 片桐氏同二席の献立　汁 あんかう 岩ぬき ゆ略 くきつけとあく

春用食類

うど ひばり 志やき さより

水菜 鯛 白魚 鮟鱇 毛貝 たひらぎ まて

あわび かまぼこ 大あさり ふくだい かれい 赤貝

こい うなぎ 志らも せり まあか くくち

うぐひ 鶯菜 みつば なすき 志めじ ちさ

まつ 山のいも さといも ごばう 大こん すいぜんのり

あまのり らんぶ 夏 鶴 雁 白鳥 大こん ぜんまい

あを鷺 鶉 むかご 宇治鶏類 塩引

子籠 丁子類 鯛 すずき こい ふな こち 赤えい

うなぎ あわび 志じみ 赤がい かれい さより ます

さけ あゆ 一も貝 あひきと 貝類 小肴類

夏くげ 初なすび 独ふり そこ木 竹の子

そのほか 青物 さゝげ 松茸 ゆうがほ うど ゆすてび

海草類 ん梅り うんひや かんてんの類

鳥類 あひる 生がけ

あめのうを すゞき うなぎ ますの塩引 志ほ引

松茸の類 大こん くわゐ なすまん菜 さけ ゆがお

そうめん 志めじ 白瓜 あとかり

ごぼう すいぜんのり いせえび 海そうめん あをこうろ

秋

冬

○んこの類 ○んこの料理 よく見て

利休が小野にて
御茶菓子

栗餅
あん　氷砂糖粉
ぶちりん

此外茶菓子は季に應じて溫冷の仕立差免なく字
てん行露之南都のかたちに出来せしを点じ多数寄
者あり綱川三斎利休偶之格子同道にて茶会に押掛
られし時の茶菓子はいり大豆にお塩けをつけてさ
よしいふことかわらけに入ていでられぬのや中濃く
たるん面白し塩茶漬にて上まで人家によりて亭主の
趣数寄一様に定めてし先家道茶菓子一通記